

## ギフトを返すべき時

沼尾 利郎

毎年7月に入ると夏休みが待ち遠しくなるものですが、私は小さい頃からやがていつかは終わってしまう夏がせつなくて、青い空や白い雲を見ると夏休みが始まる前から何とも言えないむなしさや寂しさを感じていました。親が忙しくて一人で遊ぶことが多かったからかも知れませんが、変な子どもでした。

最近の「おもいででの夏」といえば、2年前の8月に当時長女が学生生活を送っていた仙台へ小旅行をしました。風に揺れる七夕飾りを眺めながら牛タンの店でビールを飲んでいると、わずか数ヶ月前にこの地方で起きた大震災が遠い過去のように思えました。やがて夜になり、深い緑の広瀬川の河川敷から打ち上げられる花火の、その一瞬の静寂と直後の華やかな歓声からは「日本の正しい夏」が実感されました。瞬間の華麗さとすぐに消え去るはかなさこそが、花火の持つ美しさの真髓なのでしょう。

間断の 音なき空に 星花火 (夏目雅子)

白血病で夭折した若き女優が病室から見た都会の花火と、仙台郊外の豊かな自然の中で私が見た花火とは異なるものですが、震災の年に東北の地で見た花火には特別な感慨があり、鎮魂と祈りの8月になりました。

仙台と言えば、かつて私が勤務していた医科大学の講座（医局）が国内外の学会や研究会において仙台にある旧帝大の名門講座と演題数を競っていた時代がありました。もちろん、「どんな内容でも出せばいい」というものではありませんが、臨床や研究に明け暮れていた自分にとっての1980年代は、創立間もない医科大学の中で最も少人数の内科であった所属講座にとっても明治維新のような黎明期でありました。我を忘れてあることに熱中・没頭する状態を「フロー状態」といいますが、当時の医局員はほとんどが独身で病院に寝泊まりしている「浮浪状態」の者も多く、ともに苦労したという共有体験が一種の連帯感を生み出していました。携帯電話もカーナビも無い頃ですから、ずいぶん昔の話ですね。

時代が変わり指導者が変われば講座の方針や運営スタイルも異なるわけですが、大学病院で学んだものや身につけた知識・技術は、いつかは地域の患者さんに還元すべきものです。何かをインプットしたら、今度はそれをアウトプットしなければなりません。別の言い方を

すれば、私たちは人生において様々なものごとを「ギフト」としてもらっている訳ですが、もらったギフトは返さなくてはならず、それはくれた相手にではなく他人や社会に返すことだと思ふのです。

「目の前のものしか愛せない人間は変わることができない」という言葉がありますが、周囲の状況に合わせて受動的に生きるのではなく、自分の人生は自分でオペレートしたいものです。